

## スナック菓子「乖乖」

—現代台湾の新たな民間信仰？

河合 洋尚

### なぜスナック菓子が機械の傍に？

私が台湾を初めて訪れたのは修士課程が終わりを迎える 2003 年の冬頃であったと記憶している。筆者は、それから中国本土で長期間のフィールドワークに従事し、2012 年に入る頃から環太平洋の各地を歩くようになった。ただし、台湾にはその前の 2008 年からほぼ毎年のように訪れている。

台湾では主に各地の客家地域で—そして部分的には閩南人や原住民の居住地で—フィールドワークをおこなってきたが、最近気になりはじめた民間の新たな習俗がある。機械などの横に「<sup>グアイグアイ</sup>乖乖」というスナック菓子を置く習俗である。中国語で「<sup>グアイ</sup>乖」とは、「よい子」を指す。「乖乖」は 1968 年に台湾で売られ始めたコーン・スナックであり、これまで様々な種類の味とパッケージが市場に提供されてきた。パッケージが緑色であるココナッツ・クリーム味、黄色である五香（ファイブ・フレーバー）味、赤色であるチョコレート味が代表的フレーバーである。写真 1 にみるように、二つ歯の子どもが青いソンブレロ（メキシコ帽子）を被ったキャラクターが、シンボリック的存在となっている。このスナック菓子は、台湾のコンビニやスーパーなど、いたるところで売られている。



写真1 店頭で売られるスナック菓子「乖乖」（2022年9月、筆者撮影）

私は上述の通りおよそ 20 年にわたって台湾に通っているが、フィールド地で「乖乖」を

目にした記憶があまりない。フィールドワークをするなかで「乖乖」に初めて興味を抱いたのは、2022年9月である。台中市の客家地域にある用水路を見学したとき、機械の傍に緑色の袋のパッケージが置かれていたのだが、それが「乖乖」であった（写真2）。



写真2 機械の傍に置かれる「乖乖」（2022年9月、台中にて筆者撮影）

※「乖乖」の位置を赤で囲った

### 機械化・情報化時代の新たな信仰か？

なぜ機械の傍に「乖乖」を置くのか。この時フィールドワークに同行していただいた台湾客家の方々によると、それは機械が故障しないための一種のまじないである。このスナック菓子の名前が「乖乖」（よい子）だから、故障をせず「よい子」に機械が動くことを祈願しているのだという。

彼らの説明によると、機械の傍に置く「乖乖」は緑色パッケージのもでなければならない。「乖乖」の緑色、黄色、赤色のパッケージは信号機に見立てられており、緑色（＝青信号）だと機械が順調に働くが、赤色（＝赤信号）だと機械が止まってしまうからである。また、機械の傍に置く「乖乖」は賞味期限が切れてはいけない。賞味期限が切れると、効果がなくなってしまうというのが理由である。まるで生き物であるかのような説明である。私はこの話を客家地域で初めて耳にしたが、同様の習俗は客家の居住地だけではなく、台湾の各地で見られることを後に知った。

では、機械の傍に「乖乖」を置く習俗は、いつから始まったのであろうか。その起源については、次の言い伝えがある。1990年代末頃、ある台湾の大学院生が急いで論文を仕上げ

ねばならなかった時、パソコンが急に壊れてしまった。そこで彼は、机にあった「乖乖」を手に取りパソコンが無事に動くよう祈ったところ、奇跡的に起動したという。もっとも、これは都市伝説の一種と言え、本当にその時期からこのスナック菓子を機械の傍に置く習俗が現れていたのかは疑問である。私は、いつから「乖乖」を機械の傍に置くようになったのか、台湾の同世代（40歳代）の知り合い数名に尋ねたが、大抵は「ここ10年間」であるというのが回答であった。2010年代後半ということになる。「乖乖」の起源については台湾でも諸説があるだろうが、今日のような使われ方をしはじめたのはそれほど古い時期ではなさそうである。

興味深いのは、この新たな習俗は、パソコンや信号機といった機械類が存在していなければ、生じていなかったであろうことだ。私自身まだこの目で確認していないが、「乖乖」を置く習俗は—私がよく訪れる村落や社区よりも—むしろ台湾各地のIT企業やハイテク産業区などでより多くみられるとも聞く。まさに近代の科学技術が生み出した、新たな「信仰」のかたちであるといえるだろう。

### 民俗宗教の世界へ入り込む「乖乖」

ここ4年ほど、「乖乖」ウォッチをするなかで気になっているのは、このスナック菓子が台湾の宗教世界にも参入しはじめていることである。最近、台湾の廟（神々を祀る建物）における祭祀活動に参加すると、供物のなかに「乖乖」が紛れ込んでいるのをしばしば見かける（写真3）。



写真3 高雄の龍湖廟で催された中元祭の供物。果物などと一緒に「乖乖」が4つ置かれている（2025年9月、筆者撮影）

ここでは「乖乖」は、故障のリスクを防ぐというよりは、神々の前に供物を捧げて加護を祈るために使われている。だが、そうした性質の変化にもかかわらず、捧げられるのはやはり緑色パッケージのそれである。このような「乖乖」の宗教世界の参入は、最近になってますます加速しているように見える。最近では、媽祖<sup>まそ</sup>という女神のアニメ・キャラクターをパッケージとした新商品も市場に出回っている（写真4）。



写真4 媽祖の絵をパッケージとした新商品

（2026年2月、筆者撮影）

本稿は、台湾でのささやかな気づきをしたための小文である。だが、このスナック菓子の緑色のパッケージは、もしかしたら台湾の信仰世界において新たな景観の一部を占めていくようになるのかもしれない。今後、「乖乖」が台湾の新たな信仰としてどのように広まっていくのか、世界の台湾移民の間でもグローバルに普及していくことになるのか、その動きを見守っていきたい。

（かわい・ひろなお 東京都立大学）